

教養教育と図書館

渡部 幹雄

1. はじめに

教養は広辞苑によれば「単なる学殖・多識とは異なり、一定の文化理想を体得し、それによって個人が身につけた創造的な理解力や知識。その内容は時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる」と定義されている。だとすれば、教養教育は「一定の文化理想を体得することと創造的な理解力や知識を個人が身につけるために行われる教育活動」ということになる。文化は普遍的な価値によって導かれた人間の完成を目指していることからすれば、本教養の森センターが設立時に目標として掲げた人間になるための教育活動と符合する。したがってその教養教育活動を重要視しつつ本学の図書館改革を進めてきた。こうした立場に立ち本稿を進めて行きたい。なお、図書館所属の教員としては大きく二つの役割がある。一つは教養教育活動を将来的に推進する側となる学生に向けての講義に携わる教員としての役割であり、他の一つは一定の文化理想を体得することと創造的な理解力や知識を個人が身につけるために必要な資料や場を提供する図書館の環境整備を行う立場にあるとすることができる。本稿では前者を教養教育活動に関わる授業とし、後者を教養教育活動に関わる図書館活動の整備として記述することを最初にお断りする。更に付け加えれば本学の教養改革以降の5年間の実践を踏まえての内容を記述したものである。

41 ◆

2. 教養教育関連の職務に携わる人材の養成と図書館

以下に述べることは、筆者が大多数の大学図書館所属の教員とは異なり、図書館や博物館を主たる専門分野としているために特異な例である。そもそも大学図書館長で司書資格の有資格者は国立大学図書館では2017年の時点で筆者を含めて2名であり、更に図書館所属の教員の中に有資格者の存在を見出すのは極めて困難な状況である。従って一般的な大学図書館の図書館以外の専門分野の人が配置されている事情とは異なる特異なケースだと言える。

筆者の教養教育に係る人材養成には二つの種類がある。一つは教養教育関連の専門的職務に関わる人材の養成である。もう一つは一般社会人として豊かな教養を具備する人材の養成である。前者と後者では養成の目的に相違がある。

前者の教養教育関連の専門的職務に携わる人材の養成は教員、博物館学芸員、図書館司書、学校図書館司書教諭を念頭に置いている。何故ならばこれらの職務は豊かな教養を育むための各教育機関で専門職とされているからである。筆者は

これらの資格養成に係る講義の数科目を担当し、履修（終了）者は教養を育む側に立つ教員、博物館学芸員、学校図書館司書教諭の職務に就いている。大学卒業後に就くこれらの職務は教養教育活動に自ら関わる職務である。そうした意味からこれらの講義科目の意義は大きい。もちろん学生には教養教育活動の受講を通して豊かな教養を積んだ上で、更に自らそうした職務に係る自覚が要求される。なぜならばそうした職務が専門職とされるのは、単に技術や多識だけでなく創造力が常に求められるからである。課題解決のための姿勢として望まれるのは、一定の文化理想を会得し、創造的な理解力や知識によって様々な時代や環境の中で解答を導こうとする態度である。これらの専門職の養成科目においては、「多識よりは教養の高い人材の必要性」が専門的職務には必要不可欠な能力であることを踏まえての内容としていることは言うまでもない。

さて、図書館所属の教員の教養教育への関わり方は、一般教員と全く同様に、「一般の社会で人として豊かな教養を具備する人材の養成」である。著者が専門領域として講義している図書館学や博物館学も「人間になるための教育活動」であり、それが目標である。図書館学や博物館学も他の領域と同様に「人間になるための教育活動」という到達目標に変わりはない。

3. 教養教育活動に関わる図書館活動

筆者が和歌山大学の教養改革に着手して今年で5年目を迎えた。この和歌山大学の教養改革と図書館改革は表裏一体の関係である。何れも『2011—2013年の和歌山大学の行動宣言』に由来する。同行動宣言のⅠ章で『時代と社会が求める深い教養と、他者とともに問題解決に取り組むことのできる実践力をもつ人間を育てます』と謳い、具体的な行動として次の1～4が示された。

- 1 和歌山大学は、学生が子ども期から青年期に至る学習体験、生活体験等から生ずる人間形成上の諸課題をかかえていることを認識し、専門家になるための教育（専門教育 the art of being a professional）と同時に、人間になるための教育（教養教育 the art of being a human）が不可欠であると考え、この観点から本学における教育を編成します。
- 2 和歌山大学は、学生の現状と、時代と社会が求める人間像を踏まえ、教養教育の内容を編成し、また常に改善する努力を重ねていきます。
- 3 和歌山大学は、教養教育の実施に責任を持って当たる組織を確立し、教員の自主性を尊重し多様性を生かしながら、「人間になるための教育」に向けて協働の実践を行います。
- 4 和歌山大学は、教養教育の一環として学生の異文化・異世界体験学習プログラムを整えます。

さらに、同行動宣言の第Ⅱ章では『学生の学習、研究を支援する図書館を目指します』と謳い、次の1~4の行動目標が具体的に示された。

- 1 和歌山大学は、約70万冊という蔵書を持ち施設のにも優れた附属図書館を有しています。図書館は、学生が生涯にわたって自主的に学び続ける方法を習得し、豊かな学びに裏打ちされた人生を送ることができるように積極的に支援します。
- 2 和歌山大学は、図書館が誰もが集う智への誘いの場として、あらゆるジャンルの豊かな学びに繋がる場となることを目指します。
- 3 和歌山大学は、図書館の職員の体制を整備すると同時に専門的能力の向上を図り、学生・教職員はもちろん全ての利用者の方々の多様な関心に応えられるレファレンスを重視した図書館運営に努めます。
- 4 和歌山大学は、図書館が、学生の知的文化的交流の拠点にふさわしい施設整備と魅力あふれる多様な企画を実施するよう努めます。

以上のように、行動宣言の第Ⅰ章で教養教育が謳われ、第Ⅱ章で図書館活動が謳われており、教養教育と図書館活動は重要な二枚看板として位置づけされている。これを踏まえた取り組みとしてこの5年間の図書館の歩みがある。それは教養教育活動と図書館活動の蜜月の歳月でもあった。その中の図書館活動の展開や計画の概要は、『2011－2013年の和歌山大学の行動宣言』を踏まえた和歌山大学附属図書館行動計画に凝縮されている。(表1)

表2は、2015年に図書館の大規模な改修工事が実施されたが、工事前の教養教育活動の展開を含め諸々の機能が発揮されるようにと考えた構想図である。

図が示しているように図書館資料と教養の森センターとを一体化した内容で、当初から両者の密接な関係性が考慮された5年間の歩みであった。組織は人であり、人の課題の克服が常に求められる。

上記のように2011年3月に図書館行動計画が立案され、この5年間で大部分の計画を達成できたと評価することもできるが、急激な時代の変化に対応しきれていない点も存在する。こうした点への対応が今後の課題である。

4. 終わりに

今、日本の大学も図書館も、本来の力を発揮するのに必要な視点はマクロ的な視野だと筆者は考えている。高度に先鋭化した専門分野が細分化すると、全体を俯瞰する余裕を失いがちである。そうすると木を見て森を見ない状況下に置かれる。社会の各所でそうした事態が蔓延するようなことにならないだろうか。大学や図書館の世界も例外ではない。「大学とは何か？図書館とは何か？」という真理を追究する姿勢、『そもそも論』が欠落して、全体を見失う傾向にある。そう

表1 2011年度行動計画

行動計画	達成目標	行動細案
①-1 配架の工夫	配架が見やすく、目にとまる色・形	手書き・デザインの工夫
①-2 ライティング	前期、後期に一回は開催	初心者向けの講習会の開催
①-3 アクティブラーニングと語らい	一階にコーナーの設置	机・椅子をグルーピングと表示とサイン実施
②-1 学び方を学ぶ	スタディスキルとの出会いの場作り	学びの方法論を集めた棚の準備
②-2 教員との連携	教員が授業で図書館活用する機会増	各学部毎に説明
②-3 何でも相談所の開設	デスクを配置して常駐時間を確保	2階にソファ・デスク等用意して5月実施
③-1 コモンズエリアの確保	2010年度対比で50%増の来館者	一階をゾーン化して利用促進の配置換え
③-2 階別利用区分の設定	サイレントゾーンの設置	各区分による利用上のルールの徹底
③-3 ホスピタリティの徹底	智へ誘導するホスピタリティの研修	対応の初任者研修の実施
③-4 彩色・動線計画	階毎にわかり易い色別の表示と案内	什器の各階毎の色別の配置
③-5 要望に沿った快適性の追求	利用者の実態の把握	アンケートや聞き取りの実施
③-6 利用者目線の管理	利用阻害要因の削減	呼び出し等の改善工夫
③-7 学生及び教職員の活用	運営に協力する学生及び教職員の参加増	協力者への呼びかけ
④-1 スタートアップツアーの実施	年2回実施	教職員に呼びかけ
④-2 図書館内での授業	ゼミや授業で図書館を使う機会の増加	教職員に呼びかけ
⑤-1 多様な資料への演出	各種コーナーの設置	既存の資料での演出の工夫
⑥-1 職員研修の実施	休館日の研修機会の確保・研修派遣	行動計画の説明と組織編成
⑥-2 メンター制の検討	メンター制の実施上の課題の整理	資料収集と研究
⑥-3 図書館と教育	論点整理	資料収集と研究
⑦-1 書棚の装飾と工夫	テーマ展示の開催	月毎の話題図書の列置き
⑦-2 表紙見せの工夫	各分類若しくは階毎の担当制の導入	担当者の関心領域から着手
⑦-3 参加型展示の工夫	利用者と共に作るコーナーの設置	参加型マップの掲示
⑧-1 レファレンスツールの整備	レファレンス用図書・情報ツールの整備	主題目録の整備
⑧-2 レファレンスの定着化	レファレンスの担当者制	職務分掌上の検討
⑧-3 レファレンスデスクの配置	レファレンスのデスクの試行的配置	無線ランの整備とともにデスク配置
⑨-1 無線ランの充実	パソコン持込可能なエリアの拡大	無線ランのアンテナ配置
⑨-2 図書館カフェの検討	カフェ導入の課題整理	事例研究
⑨-3 飲食ゾーンの拡大	ラーニングゾーンでの成果調査・現状分析	試行的実施
⑨-4 教職員カフェの配置	試行的実施	金曜日夕方カフェの試み
⑨-5 来学ゲストの活用	来学ゲストとのサロンを試行実施	ゲストの承諾得た機会を活用
⑩-1 ミニ講演会	来学ゲストの講演会	同上
⑩-2 ミニコンサート	音楽専攻や協力者による試行実施	金曜日夕方コンサート
⑩-3 月毎の展覧会	得られた協力者で試行実施	内容は多様なものを試行的に実施

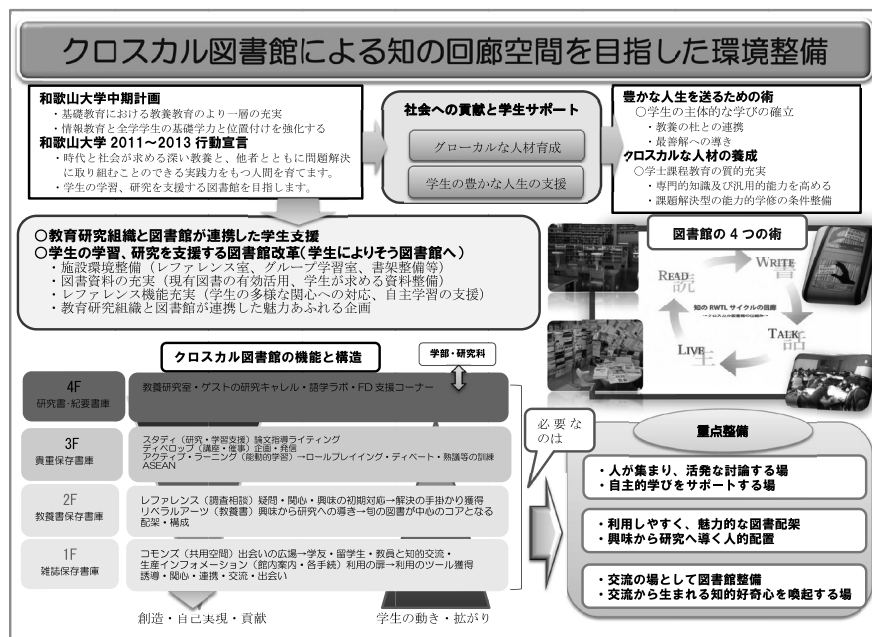


表2

いうことを問わなければ本来の大学や図書館から大きく逸脱してしまい、結局は組織の弱体化や分解の方向に向かうことになる。そのような事態に陥らないためには全体を鳥瞰できるマクロ的な視野が必要である。そういう視野を持つためには時間軸や空間軸等々の現状を客観視できる力や物事の本質を捉える力が必要となる。それが教養教育で培われる力である。そうした力を獲得するための装置の一つが図書館でもある訳である。

以前から紀州徳川家十五代頼倫、十六代頼貞が関わった南葵文庫と日本図書館協会、更にはユネスコの関係について着目している。二人とも大正期から昭和にかけて日本の図書館活動に大きな足跡を残した。外遊経験のある頼倫や頼貞の目には欧米で自然な形で普及している図書館が見えていたようである。町に欠かせない重要な施設が欧米にはあるが、日本には無いことに気が付いたようである。それが一世紀前であった。日本で一世紀後の今も図書館は未だ町に欠かせない施設に成りえていない。図書館の役割の全体像を確認する機会がなかったことが、一部分の機能のみを具えた図書館でよとしてしまったのだろう。その結果熟練した司書のいない図書館が蔓延してしまった。司書がいなくても、図書館の専門的職務が見えなくても、それが図書館の当たり前の姿と思われるようになってしまった。本来正規司書の雇用はいかなる自治体でも当然なされるべきことであるのに。こういう状態であるから、自治体の内部に本物の図書館サービスを企画し、展開する人材を期待するのは無理な要求かもしれない。人がいないので図書館の本来の役割を果たすことができない。本来の役割を果たすことができない施設は荒廃する。人材不在の負の連鎖である。となると人材養成の問題が大きくなる。

今、ごく一部のチカラで日本全体の図書館を動かすことができる工場的図書館の拡大を許してしまっている。が、効率上工場化が出来ない小さな町村のボトムアップ型図書館が、図書館を救う最後の砦かもしれない。

図書館について述べてきたが、大学も図書館と全く同様の動きが最近目立つ。人間軽視という状況である。今こそ人間になる教育活動が求められる。